映画を通じて多様性を受け入れ 変わっていくことの大切さを語る

8月26日、豊岡市民プラザで「市民ふれあいのつどいパート1　映画鑑賞会＆アフタートーク」を開催しました。この上映会は、人権について考える機会を創出し、人権尊重の意識を広げて、一人一人を尊重するまちづくりを進めることを目的としています。

今回の上映会では、「性の多様性」をテーマに2つの映画を上映し、アフタートークではクィアシネマがご専門の菅野優香さん（同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科教授）に登壇いただきました。

「映画から考える性の多様性」と題し、映画を通してみえた課題を掘り下げて講話いただいた後、木下栞さん（劇団時々）と杉本悠さん（豊岡映画センター）にも参加していただきました。お二人や会場から菅野先生に質問があり、性の多様性と人権について、参加した皆さんが考えを深められるつどいとなりました。

上映作品

『バースデイ』（公財）兵庫県人権啓発協会

性的少数者の存在や悩みに気づき、その多様性を認め、互いの人権を尊重することですべての人が自分らしく生きられる社会の実現を目指す物語。

『トランスジェンダーとハリウッド：過去、現在、そして』 Netflixオリジナル

トランスジェンダーがハリウッドでいかに描かれてきたかを、彼らを代表するオピニオンリーダーやクリエーターらが分析し、それぞれの思いを語るドキュメンタリー。

アフタートーク：講師　菅野 優香さん

性の多様性とは

日本語の「性」は、曖昧な言葉です。英語でジェンダーとセクシュアリティという2つの要素を含めた日本語を「性」と考えてください。ジェンダー研究をする立場から「ジェンダー」というのは、社会的・文化的に作られた性別と言えます。研究者は、「男らしい・女らしい」を社会の中で学びながら、女になっていったり、男になっていくと考えます。

今日の映画に共通するテーマは、「ジェンダーアイデンティティ」と「トランスジェンダー」です。前者は自分の性別についてどう認識・理解しているかを指し、後者は出生時に割り当てられた性別ではない性別にアイデンティティを持つ人です。私たちは生まれた時に、自分で性別を選んでいません。性別というのは、病院や家で「男の子ですね・女の子ですね」という風に、他人に割り当てられてきました。トランスジェンダーの定義は、この割り当てられた性別と、後に自分の感じる性別が一致しないことです。

日本語でよく使う「性同一性障害」とトランスジェンダーは、重なる部分もありますがイコールではありません。トランスジェンダーの対義語として、「シスジェンダー」という言葉があります。出生時に割り当てられた性別とジェンダーアイデンティティが合致している人です。トランスジェンダーは、基本的にアイデンティティを指す言葉です。

性同一性障害というのはアイデンティティではなく、医療カテゴリーとしての疾患名・診断名あるいは法律用語です。2013年にはアメリカ精神医学会の診断マニュアルから削除され、現在は「性別違和」（ジェンダーディスフォリア）という言葉が用いられ、WHOでは「性別不合」が使われています。

日本では、戸籍上の性別を変更できます。「性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律」（通称「特例法」）という法律です。問題が多く、特にトランスジェンダーのコミュニティから多くの批判があります。特例法では、性別変更に5つの要件＜①18歳以上、②婚姻をしていない、③未成年の子がいない、④生殖腺がない又は生殖腺の機能を永続的に欠く状態にある、⑤他の性別の性器に近似する外観を備えている＞が必要です。

私たちの権利は一人一人が持つもので、他人に制約されないことが大前提です。子どもの有無が権利の条件になることは、人権の観点からあってはならない要件だと言えます。それは世界的なスタンダードであり、日本の特例法は大きな問題をかかえています。

講師の菅野 優香さん

上映作品『バースデイ』について

『バースデイ』では、アウティングと、家族によるホモフォビア（同性愛嫌悪）が扱われていました。

「アウティング」は、ある人の性のあり方について、本人の同意なく他人に広めることです。一橋大学で大学院生が、アウティングの結果、飛び降りて亡くなったという大きな事件がありました。アウティングは人の命に関わるのです。

家族は、性的マイノリティにとって非常に厄介で、最初にホモフォビアに出会う場です。本作は、そういう側面をよく捉えていると思います。家庭は、「男の子なんだからしっかりしなさい」「お姉ちゃんなんだからお手伝いしなさい」など色んな形でジェンダーセクシャリティを教え込まれる場になっています。人生で最初に、家族から自分の存在を否定され、差別的に扱われ、抑圧され、酷い時は排除されます。家を追い出されて、ホームレスになる話はたくさんあります。

関係性が近い程ホモフォビアが強く出るのは、性的マイノリティに関する2015・2019年の全国調査を見ると分かります。年代が若いと嫌悪感を持つ人が少なく、年齢が上がると増えていきます。若い世代でも他人がマイノリティだと嫌悪感を持つ人は1割から2割ですが、自分の子どもだと問われると、4〜5割に跳ね上がります。

家族関係が近いほど嫌悪感が強く出た結果には衝撃を受けました。

上映作品『トランスジェンダーとハリウッド：過去、現在、そして』について

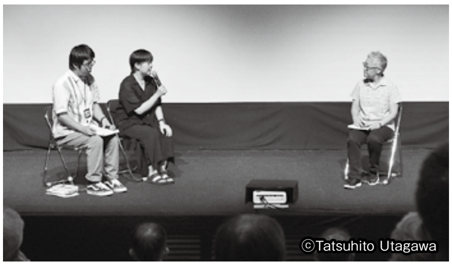
本作では、シスジェンダーがトランスジェンダーを演じる問題が取り上げられています。日本でも、トランスジェンダー当事者が演じる映画が少しずつ増えてきましたが、名前の知れたシスジェンダーの俳優さんが演じることの方がまだ多いです。映画は、演技だから当事者じゃなくてもいいのではとよく聞かれます。今日の映画『トランスジェンダーとハリウッド』を観て有名なシスジェンダーの俳優がトランスジェンダー役を演じるデメリットはすごく大きいと改めて気づかされました。シスジェンダーの人が演じて、元に戻って、やはりトランスジェンダーは本物じゃない、女装・男装みたいな印象を与えてしまうからです。

トランスジェンダーの人たちを見て真似したり笑ったりするのは、自然にやっている訳ではなく、メディアからの影響や社会的に身につけることです。メディアのイメージが全てではないけれど、やはり社会と非常に深くかかわっています。イメージを変えることは、社会を変える一歩になるし、社会が変わるとイメージも変わります。

私たちのできること

性の多様性を大切にするには、シンプルなことを考えるのが大切だと思います。人を安易にカテゴライズせず、正しい知識を得て、良いか悪いかを自分で考えて判断するしかありません。鵜呑みにせず、長いものに巻かれないというあたり前のことをするということです。

性的マイノリティが、周りにいるということを常に考えることも必要です。私は、必ず性的マイノリティがいるという前提で話をしています。それが10人に1人いるから大事なのではなくて、人権の考え方でいったら100万人に1人でもそれは大事だという風に考えるべきです。性の多様性を考えることは、究極的には社会の多様性を考えることにつながります。



（右から）講師の菅野 優香さん、代表質問者 劇団時々の木下 栞さん、豊岡映画センターの杉本 悠さん

イベントを終えて

兒島 源之 さん（豊岡市人権教育推進協議会副会長）

アフタートークは、初めての試みでした。LGBTQと一言で言っても本当に今まで知らなかったこと、気がつかなかったことがたくさんありました。2つの映画を見せていただいて、菅野先生の話をお聞きして、今日の講演が完結したと思っております。今日お聞きしましたことを今後の豊岡市の人権教育、啓発活動にぜひ生かしていきたいと思います。

アンケートに寄せられた感想

- 性的マイノリティは自分の身近にいないのではなく、見えていないだけということや、自分の「普通」を周囲に押しつけることで、無意識のうちに人を傷つけることもあることがよく分かる内容だった。
- とても分かりやすい内容だった。カテゴライズするのではなく、その人を見ることを大切にしたい。
- まず正しい知識を得ることが大事だと思った。少し他人事のことと思っていました。
- バースデイと、トランスジェンダーとハリウッド、菅野先生の話、多くの学びがありました。大変良かったです。ありのままの自分を大切にできる社会でありたいと思います。

豊岡映画センターの歌川達人さんと杉本悠さん（豊岡市地域おこし協力隊）より寄稿いただきました。